「同志社評論」3（一九七五年）

═ 目　次 ═

《主　張》……一
安保斗争の政治論としての総括……三
政治斗争・社会政治斗争　＝第三期学生運動＝……一二
明大斗争の運動論組織論的総括……二五
教育学園斗争論……五四
世界革命戦争の軍団建設と同盟の党的飛躍……七一
第一部　八派共斗解体　蜂起をめざす単一党建設を……九〇
非合法軍事組織の敵対物解党主義　＝日向一派を放逐せよ＝……九五
党内斗争の革命的推進のために……一〇三
第二部　わが同盟の立脚点について……一〇六
第二章　世界プロレタリア独裁の綱領的諸問題……一二三
日本帝国主義侵略革命前線　基地沖縄を武装斗争の砦とせよ……一四一
㈠　日本階級斗争の転換点とわれわれの道……一五四
㈡　反革命軍事体系と対決しうる国際非合法党建設のために……一六一
㈢　レーニン第三インター建設のための斗いとわれわれ……一七三
㈣　新たな国際主義のスローガンにいて……一九〇
㈤　資本主義批判と反スタマルクス主義の止揚……二〇四
帝国主義と民族・植民地問題の理論的基礎……二一八
革マル派の組織現実論批判……二二八

《主　張》

一つの時代が終わりを告げつつある。全世界に於ける、帝国主義矛盾の激化と人民の斗いの炎は、今や帝国主義に歴史的終焉の段階が到来している事を告げている。この混乱と動機の中で、だが明らかに力強く若々しい力が成長し、古いものをおしのけ、全面的にとってかわろうとしている。成長しつつある新しい力、開始されつつある新しい時代は、血と鉄の試錬をくぐり抜け、たくましく鍛えられてゆくであろう。急速に色あせ、没落しつつある古いものと訣別し、自己を新たな力と結合させ、一体化し、この新しい時代を自ら切り拓いてゆこうではないか！

我が同大学友会運動は、戦後一貫して我が国の大学の中でも最もその先進性を堅持し、最先頭で闘い抜いてきた。とりわけ、65年三派全学連の結成以降、67年10・8羽田闘争を始めとする佐世保・王子・成田とうち続く反戦・反帝闘争を、プロレタリア国際主義と組織された暴力を二大支柱として大衆実力闘争の展開をもって教育学園闘争と結合させ、その二大支柱の更なる深化を両者の内的関連の把握＝結合により70年安保闘争へと向けた、60年代後半の日本階級闘争の新たな地平を切り拓いてきた。しかしながらその闘いの発展が、69年4・28闘争を頂点として、必然的に政策阻止―全面的政治暴露から日帝打倒―権力奪取を直接めざす闘争に至って権力の密集した反革命を引き出し、そしてそれを突破できずに敗北したのである。4・28以降の破防法秩序の確立化の攻撃にあって、これを突破せんとする部分の様々な提起がありつつも、この限界を突破することができなかった。また一方、大衆武装闘争も67年10・8の公然たる武装闘争形態での登場以降、71年9・16三里塚機動隊センメツ戦に見られる突出した闘いはありつつも、総体に於いては権力の破防法弾圧によって封じ込まれざるを得なかった。この敗北の後、全国に於ける学生運動総体の、いわゆる「混迷と停滞」といわれる情況が現出していった。そして又、我が同大学友会運動もかかる情況の中で自由ではあり得なかった。71年学費闘争を三里塚―沖縄闘争という全人民的政治闘争と結合し、72年2・1の120数名の不当検挙者を出した機動隊センメツ戦として実現しつつも、60年代型大衆運動の限界を孕んでいたのである。そして2・1以降に於いては、60年代後半に於ける闘いの限界を止揚するどころかそれらを一切忘れ去ろうとし、教育学園の内へ内へと逆戻りしようとする部分さえも生み出していった。こういった傾向は、何も同大内部だけには限らず、より露骨に全国の学生運動を支配していったのである。かかる傾向の中では、大衆運動内部に於いて個別諸領域での闘争の豊富化はなされても、それらが60年代の闘いを止揚するものではなく、それどころか、資本制生産様式の諸矛盾から自然に発生する個別の諸要求を美化し、それらを固定化することをもって運動のための運動を自己目的化し、それで事足れりとするのである。あるいは、それに主体形成を意味付与して永遠の円環運動として帰結する他はないのである。こうした、おのずから発生する民主主義的な諸要求に自らの任務を拝跪させることは、それを

行なう人が望むと望まないとに全くかかわりなく、大衆に対するブルジョアイデオロギーの影響を強めることを意味する。そして更に、現在の破防法秩序の確立から市民の反動化が進む中では、この傾向はより顕著に現われ、自然発生性＝民主主義要求を固定化する部分はその反動的役割を広げるのである。

我が同大学友会運動のこの間の闘いは、何よりも我々の堅持してきた全国の革命的学生運動の最先頭のその位置をはっきりと確認し、過去を忘れ去ろうとする部分に対してその反動性を明らかにし、60年代に於ける闘いの意義を復権せしめ、そしてその意義を堅持すると共に、その限界を我々の実践的運動の中で止揚してゆく闘いとしてあった。我々は今秋季斗争を清算主義との明確な分岐を斗い取る中で、その地平を更に深化させてきた。60年後半に於ける革命的左翼の斗いの限界性は、国家に対する急進民主主義的態度が政策阻止闘争の延長線上に権力奪取を設定し、組織的には反帝統一戦線からソヴィェトープロ独を設定するといった政策阻止斗闘の連合体でしかないという手工業的組織が、国家―暴力装置の前に敗北を余儀なくされていったという点にある。このように急進民主主義の基盤は60年代革命的左翼の運動組織論、いわゆる党ヘゲモニー論にあった。これは、政策阻止闘争―街頭行動の徹底化を通じ、権力との対決の視点を明確にし、この質を生産点での闘争に還流することにより、最左派のヘゲモニーをプロレタリアートのヘゲモニーに移行し革命情勢を準備するものとしてあったし、60年代後半に於ては反戦闘争と経済闘争を展開し、それをプロ独に至る基本形態としたのである。これは大衆闘争の高揚から全人民的政治闘争の主体たる反帝統一戦線からソヴィェトープロ独を展望するものであった。しかしながら、かかる運動組織論は60年代後半に於る大衆実力闘争の巨大な高揚を巻き起しつつも、権力の密集した反革命の前に敗北していったのである。そして破防法秩序の確立の前に自然発生性が後退していく中で個々の政策阻止闘争―民主主義闘争に解体されてゆくのである。かかる60年代革命的左翼の限界を克服する作業を一切放棄した清算主義者が、インドシナ民族解放闘争の勝利に対する、日帝の統治形態の転換に対する抵抗闘争へのみ自らの実践を固定化し、60年代革命的左翼の限界性を拡大再生産し、経済主義との野合をもって沼地を形成しているのである。問題は、様々な資本制生産様式の諸矛盾に対する自然発生性をいかにして共産主義と結合させるのかということなのである。

我々は、清算主義・経済主義との明確な分岐を闘い取ってきた地平をもって更に進撃していかねばならない。

ここに百周年を迎えるにあたり、戦後学生運動史上、最も重大な意義をもった60年代革命的左翼の闘いの軌跡を復刻したいと考える。そしてこれらの論文が、我々の総括作業の何らかの手だすけとなれば幸いである。